

新明題和歌集

新明題和歌集卷第二

蛩

後西院

吹く風もやや秋ちかく呉竹に

蛩飛びかふかげも涼しき

道晃

みだれとぶ夜はの蛩の玉すだれ

あくる軒端に消えなんもをし

雅庸

宵宵に堪へずも何を思ひ河

もえて蛩の影みだるらん

員從

くるるより思ひみだれて池水に

蛩飛びかふ影ぞ涼しき

晩夏蛍

道晃

草の上の露とや消えん夏もはや

末葉にすぎる夜の蛍は

国豊

秋ちかき籬の露の夕風に

ひとりまがへて蛍飛びかふ

蛍知夜

通村

かくれては波にも消えぬ思ひとも

しらぬの蛍夜やいそぐらん

うば玉のよるこそつくれ光ありと

見し夕露も草の蛍か

実業

草の上に見し夕露はくるる夜を

風の蛍の待ちえてやちる

深夜蛍

後水尾院

あはれわが齢も今は更くる夜の

窓の蛍はあつめても何

資冬

吹く風も涼しくなりて呉竹の

夜ぶかき窓に蛍みだるる

暁蛍

雅章

灯は影うすくなる明方に

窓の光りと飛ぶほたるかな

叢螢

後水尾院

草の上に今朝ぞ消えゆく白玉か

露かとまがふよるの螢は

朽果てん後こそあらめ草の上に

螢や何のもえて行くらん

道晃

更くる夜に思ひ侘びてや草の葉に

すぐる螢も影は乱るる

実光

草の原良秋ちかくおく露に

光まがへて飛ぶ螢かな

水蛭

後水尾院

池水に猶消えやらで飛ぶ蛭

はかなくもゆるおのが思ひも

英仲

石ばしる水のながれに夜もすから

光涼しく飛ぶ蛭かな

水辺蛭

後西院

忍ぶにはあらぬ蛭の思ひ河

たれゆるならぬ影も乱れて

後水尾院

飛ぶ蛭水の下にも有りけりと

おのが思ひもなぐさみやせん

弘資

滝の糸はくるるもあかずぬきとめぬ

玉とみだれて飛ぶ蛍かな

飛ぶ蛍やや数そひぬ宵の間の

月は入江のみ草がくれに

通茂

音羽川せき入れし滝の白玉と

蛍も見えて影ぞ乱るる

音はしてゆく水くらき木がくれを

照す蛍の影も涼しき

資慶

小船こぐ堀江の蛍たが為に

よるよる波の玉を敷くらん

宗量

けちがたき思ひありとや河水に

燃えて蛍の影みだるらん

誠光

此夕涼しさあかぬ波の上に

蛍みだるる夏の川つら

江蛩

時方

そこ清き入江の波に飛ぶ蛩

よるの玉藻の光みすらん

池蛩

道晃

是も又天つ星かと雲の上の

御池の波に蛩みだれて

通村

さざれ石の中の思ひを池水の

波にうち入れて飛ぶ蛩かな

沢蛩

雅喬

風わたる野沢の水にみだれ蘆の

よるの蛩は光涼しも

俊広

飛ぶ螢草葉の影も住吉の

浅沢をのほ水清くして

沼螢

後水尾院

燃えあまる思ひはあれどかくれぬの

うきをば人にしらぬ螢も

通茂

飛ぶ螢思ひは草のしげみに

もえぞかくれぬ宵宵の影

浦螢

弘資

くるるより螢飛びかふ浦舟の

釣にともせる影も忘れず

実満

くれわたる浦わの波によせ帰る

玉かと見えて飛ぶ螢かな

窓螢

冬基

呉竹の露の光も数見えて

螢みだるる窓の涼しさ

窓前螢

通茂

くるる夜の風のむら竹露ながら

螢ちりかふ窓の涼しさ

宗条

昔思ふ螢の影はそれながら

うとき学びの窓にかひなき

通福

飛ぶ蛍身のおろかさを思へとや
くるれば窓に光みすらん

蛍過窓

仙洞

窓ちかき竹の葉分の夕風に
見えみ見えみゆく蛍かな

光雄

いさめてもやよそに過行く徒に
文もひらかぬ窓の蛍は

窓透簾

時方

あつめえぬ我をいさめて玉だれに
過ぐる蛍も光みすらん

螢火透簾

資慶

おぼつかな誰とかしらん玉簾

すきかげ見えて螢とぶなり

雅喬

雲の上にゆくや螢のすきかげも

こすのまちかき秋をみすらん

夏暁

資照

みだれとぶ螢の影もややうすし

秋ちかき夜の明方の空

夏虫

隆晃

夏虫の独思ひにこがるも

螢よりけにあはれはかなき

夏里

後西院

蛍とぶ方に今宵は宿からん

こや蘆のやの里のしるべに

新明題和歌抄卷代三

秋

信経

雲の上の蛍やつげし秋風の

いなばぞちかきはつかりの声

「国歌大観」より